



四國五郎生誕百年、没後十周年記念

浪花の歌う巨人・パギyan（趙博）声体文藝館

ヒロシマの母子像

四國五郎と弟・直登

2024年全国巡回公演 [第一期]

...弟よ！私はいま、母子像を描いている。幼い息子を抱き、娘をひきよせ、怒りと決意に光る瞳をもつ母と子を描いている。おまえを奪った者への憎しみと怒りを、わたしはこの母子像にぬりこめる。先ず何よりも、母と子を解き放ち難く結びつけている愛を、ひと筆ひと筆ぬりこめる。そして、その絵具の重なりの中に、わたしはおまえの日記の一行一行をぬりこめる。人間の最も根源的なものである母と子の繋がりを断ち切ろうとするものへの怒りと、決してそれを許さない母子の愛情を、わたしは絵のテーマとして選んだ。そして、平和のために描くことを[生き方]として選んだ。おまえの日記帳がわたしにそれをさせた。...おのおのの幸せが、おのおのの命が、おのおのの国が、いかなるものにも脅かされず、恥ずかしめられることのないために、そのために、わたしは、母子像を描き続ける。

写真：横哲

8月 2日(金) 神戸学生青年センター・ホール

8月 3日(土) 奈良県桜井・東光寺

8月 4日(日) 京都・スwingキッチン Your

8月 5日(月) 京都・スwingキッチン Your

8月 6日(火) 大阪・東成区民センター・小ホール

8月 8日(木) 名古屋・七ツ寺共同スタジオ

8月 10日(土) 東京都狛江・泉の森会館

8月 12日(月・休) 松本・中町蔵シック館

*詳細はP.4をご覧ください。

制作 コラボ玉造

〒544-0032 大阪市生野区中川西 2-15-9

<http://tamazo.org>

協賛 広島文学資料保全の会

協力 四國光



画家であり詩人でもあった四國五郎は、1924（大正14）年広島生まれ。20歳で徴兵されて満洲で従軍、敗戦後は三年余りのシベリア抑留を経験して、1948年に帰国した際に弟の直登が原爆で死亡したことを知りました。そして、生涯をかけて反戦平和のために、絵と詩で膨大な作品を描き残しました。GHQ占領下の言論統制時代、姉三吉たちとの「われらの詩（うた）の会」による「辻詩」や『反戦詩歌集』『原爆詩集』に絵や詩で参加、また、土屋清作の演劇『河』のポスター製作、「広島平和美術展」の創設といった活動とともに、NHKの「市民の手で原爆の絵を」運動にも尽力しました。山口勇子作の絵本『おこりじぞう』の絵に親しんだ方々も、たくさんいらっしゃることでしょう。

弟の直登は1927（昭和2）年生まれ。二人の兄が召集され戦地に行ったあと、母と当時八歳だった末の弟・克之を抱えて働き、1945（昭和20）年6月に警備召集を受け、防空壕掘りと町中の橋の警備を担当しました。直登の警備召集は8月3日に解除になる予定だったのに結局は7日までとの決定が下り、これが生死の分かれ目となりました。8月6日の朝、大正橋での徹夜の警備を終えて眠りについていた時、爆心地から約1キロしか離れていない「織町国民学校」臨時兵舎で被爆。翌8月7日夕方、広島市内霞町の自宅にたどりつくも、8月27日夜半、苦悶の末に息を引き取りました。享年18。

広島に戻った四國五郎は――

1948年11月9日深夜、シベリアから広島へ復員して戻ったとき、私は初めておまえが被爆して死んだことを知った。おふくろは、おまえの日記を前にしてそのことを語り、泣いた。私はその日、お前の日記を読み耽り、夜明けを迎える、帰国第一日の日記にこう書き記した。「五郎よ、直登の死に対する悲しみを怒りと憎しみ

に転化させよ！これから的人生で方向を失いかけたときはこれを読み返せ。五郎よ！直登の日記を読め！」

と、自らを奮い立たせ、生涯を掛けて「反戦平和の為に描（書）く」ことを決意するのでした。

「悲しみを怒りと憎しみに転化させる…これを一人芝居にしよう、いや、しなければならない！」…私は己の非力をも顧みず、2023年8月に『ヒロシマの母子像／四國五郎と弟・直登』を大阪で初演、その後、東京・名古屋と都合8回の公演で、狭い会場は毎回満席をいただき、約四百人の方々に観劇していただきました。今回の全国巡回公演では、研鑽を重ねた改訂版をより多くの皆さまにお届けする所存です。どうぞ、ご期待ください。

四國五郎が生きていれば、ウクライナでの戦争やパレスチナ、特にガザに於けるジェノサイドを見て、何と言ったでしょうか？どんな作品を描いたでしょうか？ポスト植民地主義、ポスト冷戦、そして、核汚染と地球環境破壊と「第三次世界大戦の危機」の時代に生きる私たちは、今こそ「悲しみを怒りと憎しみに転化」させるべきではないでしょうか？四國五郎の没後十周年を追悼するとは、取りも直さず「反戦平和の思想と行動を打ち鍛えよ！」ということなのだと、私は声を大にして言いましょう。

「唯一の被爆国」などと嘯きながら「くずれぬへいわ」（峰三吉）を蔑ろにしてきたこの国の罪はあまりにも大きく、どこまでも深いのです。だからこそ「被爆八十周年」を戦争屋どものヘゲモニーに渡しては、断じてなりません！「被爆体験の風化」などと言う戯れ言と虚言に対して、私は本作品で「理性の実弾」（中村哲）をぶち込む覚悟です。

趙博 拝。

